

学際教育の実質化に向けての取組

河野, 昭彦

<https://hdl.handle.net/2324/19900>

出版情報 : 2011-06-30. 九州大学高等教育機構教育改革企画支援室
バージョン :
権利関係 :

平成22年度 教育の質向上支援プログラム(EEP)実績報告書

| | | | |
|---|--|---|------------------|
| 部局名 | 人間環境学府 | | |
| 申請者(部局長) | 河野 昭彦 | | |
| 1. 取組の名称 | 学 際 教 育 の 実 質 化 に 向 け て の 取 組 | | |
| | (副題) 柔軟な学際教育プログラムの立案と実施のための学際教育コーディネータの創設と試行 | | |
| 2. 取組実施担当者 | | | |
| ふりがな 氏 名 | 担当学府・学部・職名 | 現在の専門 | 役割分担 |
| はまもとみつる 浜本満 | 人間環境学府・教授 | 文化人類学 | 代表者 |
| とおやこういち 遠矢浩一 | 人間環境学府・准教授 | 臨床心理学 | コーディネータ活動評価担当 |
| みつどうひろゆき 光藤宏行 | 人間環境学府・講師 | 知覚心理学 | EEP事務統括及びコーディネータ |
| いじましゅうじ 飯嶋秀治 | 人間環境学府・准教授 | 共生社会システム論 | コーディネータ |
| もとかねまさひろ 元兼正浩 | 人間環境学府・准教授 | 教育法制・教育行政 | コーディネータ |
| のむらとしこ 野々村淑子 | 人間環境学府・准教授 | 教育文化史 | コーディネータ |
| でぐちあつし 出口敦 | 人間環境学府・教授 | 都市設計学 | コーディネータ活動評価担当 |
| あかしやすのり 赤司泰義 | 人間環境学府・教授 | 建築環境・設備 | コーディネータ活動評価担当 |
| ありまたかふみ 有馬隆文 | 人間環境学府・准教授 | 都市計画、環境メディア | コーディネータ |
| やまぐちけんたろう 山口謙太郎 | 人間環境学府・准教授 | 循環建築構造学 | コーディネータ活動評価担当 |
| 3. 実施・評価・改善のための組織体制の活動状況 | | | |
| <p>(取組計画書の「実施・評価・改善のための組織体制」を転記のこと。)</p> <p>学際研究・教育コーディネータの活動における問題点、改善点などは、関係する3委員会、教務委員会、企画委員会、将来構想検討委員会において随時検討し、逐次コーディネータの実際の運営にフィードバックする。</p> <p>註 2010/4 より企画委員会は廃止され、その機能は合同運営委員会(実施に関わる側面)およびコーディネータ委員会(企画にかかわる側面)によってそれぞれ担われることとなっている。</p> | | <p>活動状況(会議等の開催日、検討内容等)</p> <p>コーディネータ委員会の構成(氏名・専攻・コース)</p> <p>有馬隆文(都市共生デザイン専攻・アーバンデザイン学)*</p> <p>清家 規(都市共生デザイン専攻・都市災害管理学)</p> <p>飯嶋秀治(人間共生システム専攻・共生社会学)*</p> <p>佐々木玲仁(人間共生システム専攻・臨床心理学指導・研究/実践臨床心理学専攻(専門職学位課程))</p> <p>光藤宏行(行動システム専攻・心理学)*</p> <p>山本教人(行動システム専攻・健康行動学)</p> <p>元兼正浩(教育システム専攻・現代教育実践システム)*</p> <p>野々村淑子(教育システム専攻・総合人間形成システム)*</p> <p>阿部吉雄(教育システム専攻・国際社会開発プログラム)</p> <p>古賀 靖子(空間システム専攻・建築環境学)</p> <p>小山 智幸(空間システム専攻・建築構造学) 委員長</p> <p>末廣 香織(空間システム専攻・建築計画学)</p> <p>(* はEEP取組実施担当者を兼ねる)</p> <p>学際企画室の構成</p> <p>Jeffrey Gayman (教育システム専攻)</p> <p>大沼夏子 (行動システム専攻)</p> | |

①部局名:人間環境学府

②取組名: 学際教育の実質化に向けての取組)【平成21年度採択・事後】

コーディネータ会議

第7回(2010/4/13)

調査報告書・多分野連携プログラムの実施計画について

第8回(2010/7/6)

外部向けwebページ・マンスリー学際サロン・次年度取組について

第9回(2010/9/27)

年度末シンポジウム・アンケート・次年度取組について

第10回(2010/12/27)

次年度取組のためのインタビュー・年度末シンポジウムについて

第11回(2011/1/26)

次年度の多分野連携プログラムコーディネータについて

第12回(2011/2/16)

次年度の多分野連携プログラムコーディネータ・来年度のコーディネータについて

第13回(2011/3/15)

教員インタビューについての報告・多分野連携プログラムパンフレット・年度末シンポジウム実行計画について

これらのコーディネータ会議とは別に、毎週水曜日12:00-13:00に人環学際サロンにてウィークリーミーティングを開催し、常時4~5名の委員が参加して、学府における学際活動全般、コーディネータ活動の進行状況等について報告しあった。

マンスリー学際サロン

第1回マンスリー学際サロン(2010/5/27)

話題提供: 飯嶋先生

第2回マンスリー学際サロン(2010/6/24)

話題提供: 元兼先生

第3回マンスリー学際サロン(2010/7/22)

話題提供: 小山先生

第4回マンスリー学際サロン(2010/10/28)

話題提供: 高野先生

第5回マンスリー学際サロン(2010/11/24)

話題提供: 野々村先生

第6回マンスリー学際サロン(2010/12/15)

話題提供: 清家先生

第7回マンスリー学際サロン(2011/1/26)

話題提供: 佐々木先生

2009年度活動報告書刊行

「学際白書2009 ―コーディネータ取組の記録―」(2010/7 発行)

「学際白書2009 資料集」(2010/7 発行 PDF媒体)

調査活動

2010/11~2010/3

アメリカ合衆国における学際教育関係学会の活動に

についての現地調査(J. Gayman)

トヨタ財団(光藤・佐々木)、第一生命研究所(野々村)、東急総合研究所(野々村)、福岡アジア研究所(野々村・高野)、都市活力研究所(浜本)等のプログラム担当者に対する聞き取り調査

アンケート実施

2010/10～2010/11

教員インタビュー実施

2011/1～2011/3

コーディネータが二人一組になり、個々の教員と研究関心、連携の可能性などについて30分～60分のインタビューを行っている(現在、教員12名に対して実施)

多分野連携プログラム

22年度においては以下の5つの取り組みを走らせた人間諸科学における『進化心理学』の位置(谷口・橋彌他、6名)

人間環境実践知の構築～人間と環境に働きかける技法と専門知の「あいだ」を考える～

(安立・岡他、10名)

建築災害と生理・心理(小山田・光藤他、9名)

人環の叡智で学校の危機を管理する(元兼・有馬他、7名)

異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス(南・佐々木他、4名)

23年度に向けて二つの新たな取り組みを提案した子どもの育ちを支える共同関係の構築に向けて～福祉と教育を結ぶ領域横断的基礎研究～(松崎・田上他、7名)

子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究(有馬・元兼他、7名)

(22年度に実施した「人間環境実践知の構築」「人環の英知で学校の危機を管理する」は終了しました)

コーディネータ活動、多分野連携プログラムの取り組みに対する評価

2011/1/21 EEPの評価担当委員による評価委員会開催

またこれとは別にコーディネータの活動は、逐一、教授会、将来構想検討委員会等で報告され、またカリキュラム等に関するコーディネータからの提案はその都度教務委員会によって検討審議されている。

2011年11月に行った教員に対するアンケートで、当取組に対する教員の評価をモニターした。

専攻を超えた教員・学生の交流のための学際ネットミーティング

2011/3/2 貝塚キャンパス中庭にて開催

年度末シンポジウムの実施

2011/3/23

「人環シンポジウム2011 ～学際的展開とコーディネータの取組」

以上の活動記録はウェブ上で学内から閲覧可能である。(現在取りまとめ中の報告は除く)

<http://www.hes.kyushu-u.ac.jp/coordinator/>

<http://www.hes.kyushu-u.ac.jp/coordinator/working/index.html>

4. 取組に係る具体的な成果 (教員の意識向上等取組の波及効果等)

学際的取組に関しては人間環境学府内部においても未だ若干の温度差を残しているが、若手教員を中心とするコーディネータの積極的な活動を通じて、教員の間での学際的取組に対する意欲は高まりつつある。水曜日の昼食時に毎週行われるウィークリー・ミーティングにおける専攻を超えた自由な討論も定着しつつある。また22年度は月に一回学府所属教員が自分の研究について紹介する「マンスリー学際サロン」を開催し、専攻を越えて互いの研究に対する興味関心を育成する試みを行ったが、これも次第に多くの参加者を集めつつある。また昨年度の本取組みによる調査活動報告を『学際白書2009』として公刊し、学府構成員へのコーディネータ活動の周知を図った。

また22年度は5つの多分野連携プログラムを実際に走らせたが、この連携取組みに参加した教員、学生ともに高い参加意識が見られ、他分野の研究者との議論を通じての研究関心の活性化を経験した。後述するアンケートにおいても、多分野連携の取組みについては参加教員からの高い評価を得ている。この試みは23年度においても二つの新たな連携チームを加え、継続することになっているが、今後とも本学府の特色ある取組みとして継続していく方針である。こうした小回りのきく柔軟な連携チームの創出とそれらの自律的活動は、そのなかから大規模な学際研究領域やプロジェクトが成長するシーズとしての役割を果たすことが期待される。事実、22年度には、こうしたチームの中から科研費への申請も数件行われた。

なお5つの多分野連携プログラムについては1月に、独立した評価委員による評価がなされ、いずれについても所定の目標を達しているとの評価が得られている。

また22年度は本研究院の『萌芽的学際研究助成』の研究チームとの共同で、学際教育の出口についての研究も進み、トヨタ財団、第一生命財団等の民間財団とのインタビュー調査などを行ない、また合衆国の学際教育関係の学会についての現地調査と関係者に対するインタビューも行った。その結果はウェブ上で順次公開される予定である。さらに昨年度に引き続き、教員の研究関心についてのより突っ込んだアンケートを実施し、それに基づいてコーディネータによる個別教員との個別インタビューも順次実施しつつある(その結果もウェブに順次公開の予定である)。

その他、屋外の共用空間を利用して異なる専攻に属する学生・教員の交流をはかる「学際コネクティング」も成功裡に開催された(これは多分野連携取組みの一環として行われた)。

本取組みは、学際的研究・教育の活性化は、何か大掛かりな制度的装置によってではなく、教員相互の日常的で小回りのきいた柔軟な連携実践の中から生まれるとの想定のもとに出発した取組みであるが、現在この想定の正しさについて確かな感触を感じつつある。

3月23日には、学府FDの一環として、学府同窓会との共同開催で「人環シンポジウム2011 -学際的展開とコーディネータの取組-」を開催し、本取組みについての成果発表を行った。

なお以上の活動の報告書は2012年度に刊行予定である。